未熟児における母子相互作用
ー母子対面場面にみられる母親の行動ー

竹内　徹（大阪府立母子保健総合医療センター周産期第２部）
藤村正哲（　〃　）

1) 研究目的

前回われわれは「極小未熟児における母子関係」とくに母子分離の母性行動に与える影響をとりあげ，極小未熟児の母親についてその養育態度および心理学的考察を行なった。

今回は未熟児における母子のbondingと母性行動の形式に影響を及ぼすと思われる諸要因のうち，母子対面の時期と場面に関する要因を明らかにするため，基礎的な資料を得ることを目的とした。

2) 研究対象

大阪市内にある淀川キリスト教病院で出生したもの，または他院にて出生後搬送されてきた極小未熟児ないし尋常未熟児とその母親１１組である。なお当院では５年前より，現母子医療センターと同じく，分娩直後から母子対面を行ない，さらに直接児に触れること，また両親は保育器のあるＮＩＣＵに入室し，器内の児と対面，児に触れることが許される。また器外保育が可能になれば，母親は保育に積極的に参加できること，またこのため比較的早期に退院が行われる等配慮されている。

3) 研究方法

次の２点すなわち，(A)母親の初回対面をＶＴＲにより分析して，早期対面場面における母子相互作用を観察すること，(B)母子対面場面の継続的観察によって未熟児の母子のbondingに重要と思われる要因を明らかにすることであった。なお(A)の観察時は，ＶＴＲ用カメラ・マイクは母親の目に触れないよう配慮し，各行動の出現頻度・継続時間・経時的変化を分析した。

4) 研究結果

(A)早期対面における母子相互作用

表１は研究対象となった母親と，未熟児の観察事例を示す。体重は９５０～1,９２０ｇと比較的極小未熟児が多く，平均体重は1,４２８ｇであった。６例中子と対面し，子を直視することをためらった母親が，１例みられた。また対面中，顔をしかめる・まゆをひそめる・子に触れることをためらいがちであった事例が比較的多く，母親の子に対する関わりは消極的であった。母親の不安要因を明らかにする目的で，表出行動の豊かであった事例ＭＥyyについて，さらに詳細に分析した。図１は，母親の表情すなわち「顔をしかめる」「まゆをひそめる」「ほほえむ」といった表情を誘発した事象を示す。各種事象によって母親の消極的表情が出現しているが，同時に子どもの自発的行動や，母が医師・看護婦と話しをすることによって，「ほほえむ」という積極的な表情が多く出現した。図２をみると，とくに子どもの自発的行動が母親の積極的行動をひきおこすことが明らかである。

図３は，全経過中の母親の表情の変化と，それを惹起した事柄について図示したものである。対面場面ではじめ消極的でかつ否定的であった母親が，次第に不安が和らぎ積極的な行動を表出しはじめた様子が明らかにわかる。（なお全経過中医師・看護婦が立ち会い，適切でわかりやすい説明と励ましの言葉をたえず与えていた。）

(B)母子対面場面の継続的観察

表２は対象となった母子と，各観察場面(I)保育器内の子，(II)常時保育器内にいるが数分抱いて器外保育の可能な状態の子，(III)常時コットにいるが抱いて哺乳ビンで授乳可能となった子，(IV)沐浴等の保育場面で様々な世話のできる子，（退院直前）の４場面を示したものである。

母親の行動分析は，母と子のen face position子を指先きでなでる等の主として愛情表現と思われる「いつくしむ行動」，一方子に話しかける，指でつつく，唇や舌で音を出す，子をゆする，軽く打つ等の子の覚醒レベルを調整すると思われる

「あやす行動」について観察した。図4は事例MEkrの結果を示したものである。保育器内にいる子との対面場面では，母親の積極的行動は生起しないが，抱いたり授乳する場面では，「いつくしむ行動」の種類が増加し，沐浴などを行なうような退院直前の場面では，「あやす行動」が著明に増加するのが認められた。母親との面接結果では，図4下部に示したように，分娩後子の声を聞いて安心するが，初回対面後は「何もしてやれない」無力感を訴え，他の母親でも初回対面を境に子に対する不安や罪責感を表わす危機的変化がみられる。しかし子を抱いたり授乳する場面を経過するにつれて「かわいい」「帰りたくない」などの愛情に変化し，入浴可能になった退院前頃は，気持に大きい余裕が生じるのが認められた。

5) 結　語

保育器内養護児の母親の初回対面場面では，母親の行動には消極的反応が多かったが，医療者側の支援があれば，子の自発的運動や能動的活動に対して積極的な反応が認められた。また器外保育が可能になる頃，母親は子に積極的に関わり始め，授乳や沐浴等の世話をすることによって母子のbonding が強固になっていくように思われた。

文　献

1) 竹内徹：「保育器養護児の母子間における問題点」第17回日本新生児学会解説講演（印刷中。

2) 竹内徹，藤村正哲：極小未熟児における母子関係 － とくに母子分離の母性行動に与える影響

（なお本研究に全面的な協力をいただいた大阪大学人間科学部糸魚川直祐助教授，鎌田次郎，近藤清美，根ヶ山光一各氏に深謝いたします。）

表1

母親	分娩室対面	出産歴	児の状態 体重	児の状態 妊娠期間	産後対面迄の期間	対面時間	同伴者の滞在期間(%)	母が子に触れる行動 きっかけ	母が子に触れる行動 発現時間(%)	対面中の表情 gr	対面中の表情 fr
MEyy	無	初	1,440	32 2/7	2日	15′45″	D:100 N:100	Dに励まされて	25″(2.6)	有	有
MEft	無	初	950	27 4/7	16時間	12′55″	N:92.3	Nに励まされて	33″(4.3)	無	不明
MEyn	無	経	1,270	27 4/7	11時間	3′10″	N:49.0 F:100	拒　絶	0″(0.0)	無	不明
MEhr	有	経	1,240	29	6日	10′ 7″	N:43.2	自主的に	39″(6.4)	無	無
MPkh	不明	初	1,745	34	12時間	3′44″	D:100	Dがフタをあけて	59″(26.8)	無	有
MPhb	無	経	1,920	31 5/7	3時間	2′24″	N:100	自主的に	3″(2.1)	無	有

D：医師　N：看護婦　F：子の父親　gr：顔をしかめる　fr：まゆをひそめる

表2

対象者	出生時体重	妊娠期間	子の性	出産歴	観察対象者					面接対象者
					I		II	III	IV	
					A	B				
MEhr	1,240	29	女	経	1	2		3	4	○
MEft	980	27 4/7	女	経	1	7				○
MEyn	1,270	27 4/7	男	経	1	10				
MPyy	1,440	32 2/7	女	初						○
MPkh	1,745	34	女	初	1			3		
MPhn	1,700	33	男	経				1	3	○
MPnn	1,820	29 5/7	女	初				1	2	
MPyk	2,120	36	男	初				1		
MPmf	1,950	36	女	経					1	
MPhb	1,920	31 5/7	女	経						○

I・保育器内の子との対面　II・抱きあげるときの対面
III・哺乳ビンで授乳時の対面　IV・退院直前の対面

A, B：I の場面で，異なる時期を示す
＊何回目の面会かを示す

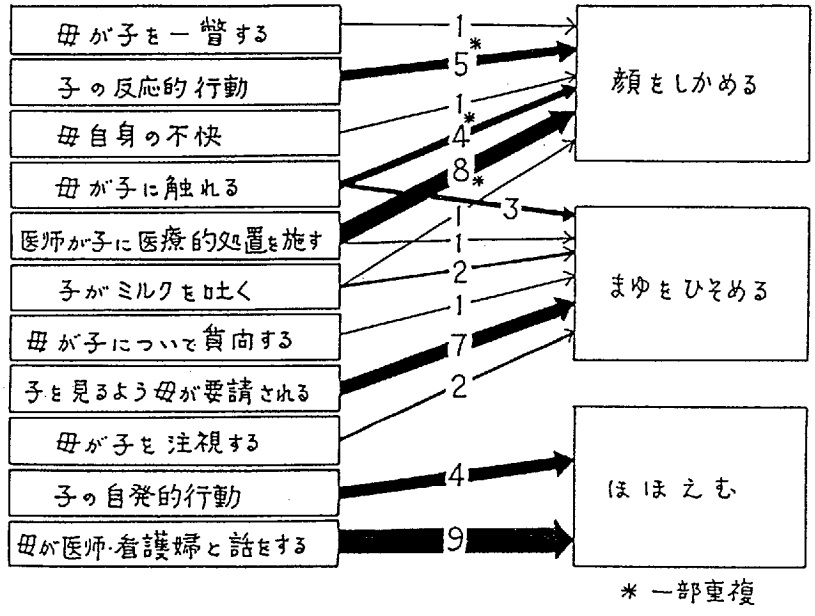

図1　MEyy の表情を誘発した事象

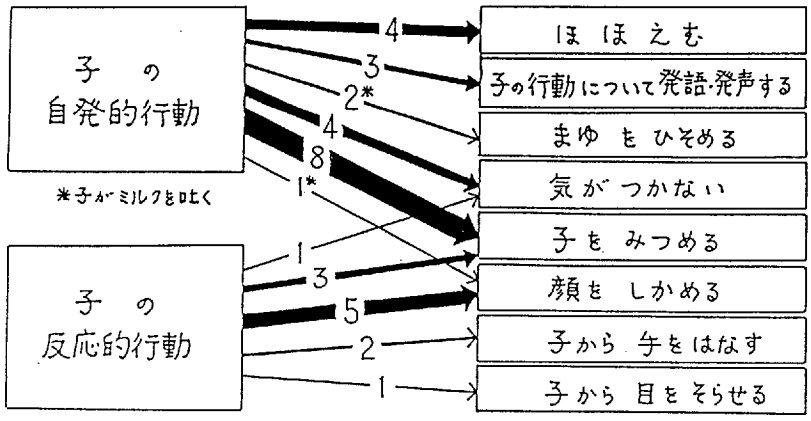

図２　子の行動によって生じたMEyyの反応

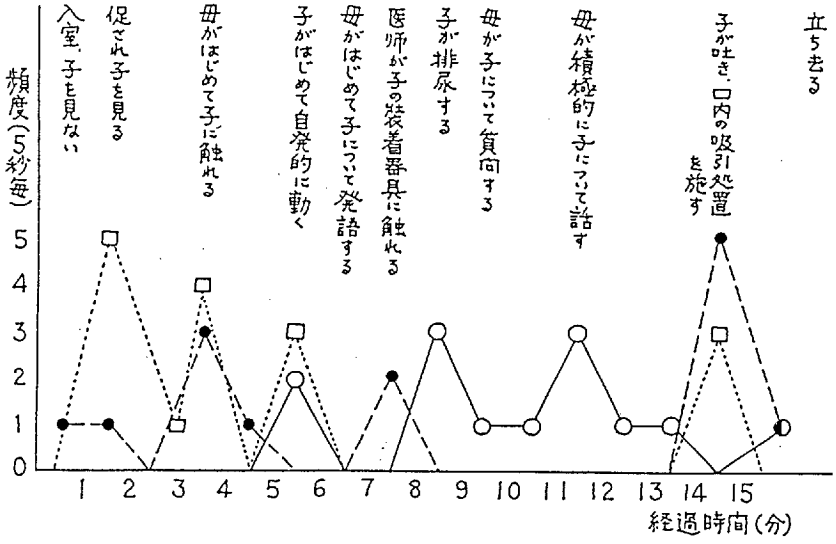

図３　MEyyの表情の経時的変化

□　まゆをひそめる
●　顔をしかめる
○　ほほえむ

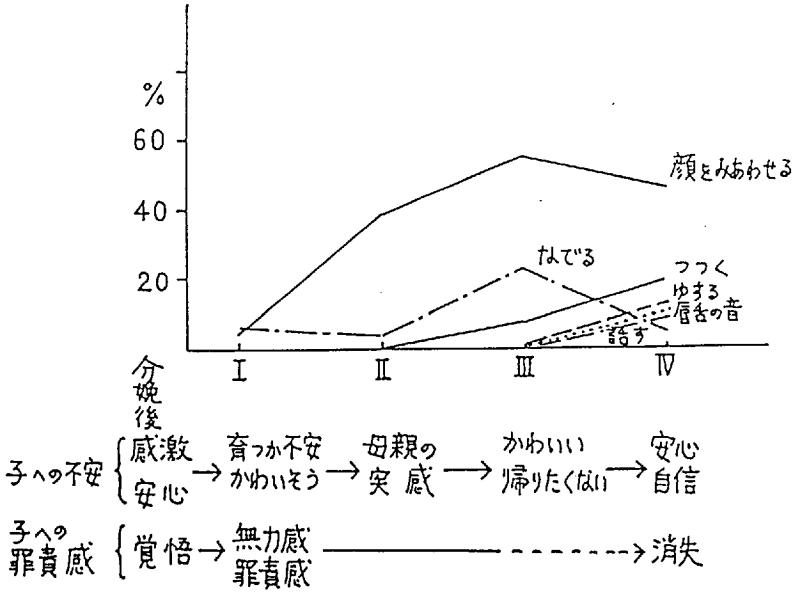
%
60
40
20
顔をみあわせる
なでる
つつく
ゆする
唇の音
話す
分娩後
I
II
III
IV
子への不安
感激
安心
育つか不安
かわいそう
母親の
実感
かわいい
帰りたくない
安心
自信
子への
罪責感
覚悟
無力感
罪責感
消失

図 4

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1)研究目的

前回われわれは「極小未熟児における母子関係」とくに母子分離の母性行動に与える影響をとりあげ,極小未熟児の母親についてその養育態度および心理学的考察を行なった。

今回は未熟児における母子のbondingと母性行動の形式に影響を及ぼすと思われる諸要因のうち,母子対面の時期と場面に関する要因を明らかにするため,基礎的な資料を得ることを目的とした。